

フッサール初期時間論から中期時間論への予持概念の変化

柳川 耕平
(立命館大学)

はじめに

本稿においては、以下のことが示される。すなわち、初期時間論における予持概念と『ベルナウ草稿』(以下『ベルナウ』と略記)における予持概念が異なるものであり、『ベルナウ』の予持は予持自身に対しても働くものであるということ、そしてこのような性質が記述されることによって『ベルナウ』の予持は時間客観知覚の場面と時間意識の場面にまたがるものになっているということ、が示される。

予持概念を扱った先行研究としては、D・ローマーによる「フッサールのベルナウ草稿につながる予持の分析——予持は何を“予持”するのか？」¹を挙げることができる。この論文においてローマーは、『ベルナウ』の記述や、『内的時間意識の現象学』(以下『時間講義』と略記)の中の1917年に加筆された部分²を参照しつつ、「予持は何を予持するのか」という問いを立てて予持についての考察を行っている。この考察から彼は、把持を予持するR予持と到来してくるヒュレーを予持するH予持を区別し、さらにH予持には経験に基づく予期が関与している可能性があることを指摘している。ローマーの指摘は重要であり、示唆に富んでいるが、それにもかかわらず、この研究には不備があるように思われる。というのも、彼は『時間講義』を参照しているが、彼が参照している記述はいずれも『ベルナウ』が書かれる直前に書かれたものであり、『時間講義』の中の記述とは言え、中期時間論の記述として扱われるべき記述である。したがって彼はフッサールの初期時間論³を参照しているとは言えない

1. D.ローマー、「フッサールのベルナウ草稿につながる予持の分析——予持は何を“予持”するのか?」、『フッサール研究』所収、第二号、浜渦辰二訳、2004年、191-206頁。

2. 具体的には第24、40、43節である。

3. 本稿におけるフッサール時間論の時代区分はXXXIII巻のR、ベルネとD.ローマーの連名によるEinleitungの見解に依っている。このEinleitungにおいては1905-1911年の期間を

のだが、論者の見るところ、初期時間論において記述されている予持概念と『ベルナウ』の予持概念とは異なっているように思われるのである。もし本当にこのような事情があるとするなら、『ベルナウ』における予持を解明するためには、初期における予持との比較を行い、両者の違いとそれによってもたらされるものの考察が不可欠なはずである。

以上のような見通しのもと、本稿においては、まず初期時間論における予持を概観し、これが〈時間客観の知覚〉という枠組みの中で考えられていたということを示す（第一節）。次に『ベルナウ』における予持を概観し、これが予持を予持するという性質を持つということを示す（第二節）。そしてこの性質があるために『ベルナウ』の予持は時間客観知覚の場面と時間意識の場面にまたがっているということを示す（第三節）。

第一節 初期時間論における予持の特徴

初期時間論におけるフッサールの予持にはどのような特徴があったのだろうか。予め結論を提示しておく、次のようになる。すなわち、①初期時間論における予持は個別的な対時間客観に対する知覚に対応した個別的なものであり、そして、②そもそも時間客観の知覚が空間的事物の知覚と類比的に捉えられており、その文脈において初期の予持はある対象の、未来における、多かれ少なかれ規定された内容を志向するものとして考えられていたと見られる。以下で順に確認していく。

まず、初期時間論のテキストの中の予持に関する箇所を解釈し、初期時間論における予持概念について考察しよう。予持が登場する箇所は非常に少ないが、ここではその中の一つであるフッサール全集 X 巻の Nr. 45 における予持概念についての記述を扱う。なお、Nr. 45 は編者のペームによって「意識流の二重の志向性」という題名を付されており、ここでフッサールは、予期や記憶に触れながら、意識作用の自己意識というものに言及している。

初期時間論に含めており、1917-1918年の『ベルナウ草稿』（以下『ベルナウ』と表記）を中期時間論の中心テキストとして考えている。よって『ベルナウ』や1917年に書かれたテキストは本稿においては中期時間論のテキストとして扱う。また、X巻に収められたテキストのうち、最も早いものは1893年頃に成立したと考えられている。ゆえにフッサール時間論の初期の思索は1890年代の初頭には始まっており、1910年代の中頃には中期への移行を始めていたと考えられるのであり、本稿ではこの時期をフッサール時間論の初期とみなす。

内在的な時間客観、現にあるこの内在的な音-内容Ton-Inhaltが、まさにそうしたものであるのは、それ[その音-内容]がその「顕在的なaktuell」持続の間中來たるべきものを指しverweist auf ein Künftiges、過ぎ去ったものを遡って指すzurückweist auf ein Vergangenes場合に限られる。今意識されている音Der Tonは、ある種の仕方ですらあるes istのであり、ある構成されるべき現象において、以下のような具合にそうする[來たるべきものを指し、過ぎ去ったものを遡って指す]のである。すなわち、この構成されるべき現象が、まさしくこの音の過ぎ去った経過を新たに準現在化する理念的な可能性を担保するという具合に、まさしくこの音の過ぎ去った経過を準現在化の仕方ですら再び構成する理念的な可能性を担保するという具合に、である。そして未来への絶えざる「志向」eine beständige „Intention“ in die Zukunftも同じ具合である。持続の顕在的な現在の部分は繰り返し新しい今を開始し、そして予持Protentionが音を-構成する「諸現出」Tonkonstituierende „Erscheinungen“に付着する。[予持は]音がまさに持続している間はこの音に向かう予持として充実されsich erfüllt、かわりに何らかの新しいものが始まる時には、廃棄され変化する。(X, 297)

まず、引用箇所末尾の「[予持は]音がまさに持続している間はこの音に向かう予持として充実され、かわりに何らかの新しいものが始まる時には、廃棄され変化する」という記述に着目してみよう。この記述によれば、予持は〈ある対象〉(この場合は音)、より正確に言えば〈ある個別的对象に対する知覚〉が持続している間のみ存続するものであり、その対象に対する知覚が終了した場合、あるいは別のものに移った場合、それまで働いていた予持は廃棄され、かわりに別の予持が新たに発動するのである。つまりこの記述によれば、個別的对象の知覚ごとに個別に予持が発動し、それぞれの予持の射程は〈対応する時間客観知覚が終わるまで〉なのである。一言で言えば、ここで述べられている予持は個別的对象への知覚の範囲内でのみ働く、個別的对象の働きだということになる①。

またフッサールは予持の充実に関して「音がまさに持続している間はこの音に向かう予持として充実される」と記述している。この「音がまさに持続している」というのは、当該の音が今まさに現出しているということであり、予持は「音」が現出することで充実されるのだと解釈できる。ところで現象学において充実とは、空虚に志向されていたものが与えられることを言うので、予持が「音」の現出によって充実されていることから、予持が「未来への絶えざる『志向』」(X, 297)であることも考慮して、予持が予持しているのは〈ある対象の未来の時点における現出〉であるこ

とが分かる。これは〈対象〉という枠組みの下にあるものである。

この〈未来の時点における現出〉と、それを統括する〈ある対象〉という枠組みは、Nr. 45 (1907年) と同時期のものである『事物と空間講義』(1907年。以下『事物講義』と略記) にも見られる。『事物講義』では空間的事物の知覚についての記述が展開されており、それによれば、ある空間的な事物(例えば家)の知覚においては、本来的現出 *eigentliche Erscheinung* と非本来的現出 *uneigentliche Erscheinung* とが区別され、前者の相関項である「本来的意味での知覚されたもの、実際に呈示へともたらされている対象の側面 *die wirklich zur Darstellung kommende Seite des Gegenstandes*」(XVI, 50)、すなわち今目の前で知覚されている「側面 *Seite*」と、「対象の残りの中」にあるとされる後者の相関項、すなわちその対象の今は知覚されていない「側面」が区別されるという (Vgl. Ebd.)。つまり、ここでは現出していない側面と、現出している側面が問題になっているのだが、このとき両者はともに〈知覚されている対象〉(この場合は家) という枠組みの中に収まっており、これは Nr. 45 で確認された〈ある対象〉と〈未来の時点における現出〉の構図と極めてよく似た構図である。以上を踏まえ、『事物講義』における「非本来的現出」と Nr. 45 における予持、『事物講義』における今は知覚されていない「側面」(以下〈非現出側面〉と表記)⁴と Nr. 45 における〈未来の時点における現出〉、すなわち予持されたものは、ほとんど等しいものとして解釈されうると考えられる。

このように、予持が「非本来的現出」であると解釈できる記述は他にも多々見られる。フッサール初期時間論における予持記述の主要なものとしては、『時間講義』の §14、§16、X 巻 B の Nr. 12 における「直観的予期」についての記述(これは予持として解釈可能である⁵) を挙げることができるが、これらは全て「非本来的現出」と解釈できる。以下で見ていこう。

§14 においてはメロディーの知覚体験を想起する際のことのことが扱われつつ、想起においても知覚と同様の構造が見られるということが主張されており、その共通の構造として予持と把持が取り上げられる。そして(想起における)予持について「まだ聞

4. 把持が把持するものも〈非現出側面〉であり、把持も「非本来的現出」と解釈でき、予持と把持の間に明確な相違は無いことになるだろう。実際、初期において予持と把持は類比的に考えられていたと見られ、例えば『時間意識』の第26節においても、予持は予期直観と表現されつつ「予期直観は逆立ちした記憶直観である」(X, 55-56)とされていた。また、第一節で確認した Nr. 45 においても、予持と把持の働きが *verweisen*、*zurückweisen* と表現されていたが、これらの言葉は *weisen* という語幹を共有しており、やはり類似的な関係が表現されている。

5. 予持とは未来への志向であるが、この「直観的予期」は「各々の新たな音が前方に [=未来に] *vorwärts* 方向づけられた志向」と表現されている。「直観的予期」が知覚に附随しているように記述されていることも踏まえ、本稿ではこれを予持として解釈した。

こえない音の予期 Erwartung (予持 Protention) が、今現出し、擬似的に gleichsam⁶まさにいま聞こえる音の統握 Auffassung と融合する。」(X, 35) と述べられている。ここで予持されているのは「まだ聞こえない音」であるが、これは「メロディー」の(想起における)知覚の話をする中で出てきた「まだ聞こえない音」である。したがってこれは先述の〈非現出側面〉であると理解でき、ここでの予持は「非本来的現出」と解釈できる。

§16においても「非本来的現出」としての予持が見出される。§16 全体においては、非現在の的なものを与える働きとしての把持ないし予持と、そのような非現在の的なものを含まないような今この瞬間における与件を与える、いわば狭い意味での知覚⁷、の区別が議論される。さて、このような文脈を持つ§16において時間客観の成り立ちを説明する箇所があり、そこで予持が登場する。この箇所で予持は、時間客観が包含している「時間的な諸区別」を把持とともに構成するものとして登場する。この箇所において扱われている時間客観はメロディーであるが、このメロディーについてフッサールは『メロディーの知覚』の場合われわれはいま与えられている音と過ぎ去った諸音とを区別して、前者を『知覚されている』音、後者を『知覚されていない』[音]と呼ぶ。しかもその反面われわれはそのメロディー全体を知覚されているメロディーと呼んでいる。」と述べている。したがって、時間客観、メロディーが包含する「時間的な諸区別」というのは、メロディーの様々な時間位相における「音」、様々な時間位相におけるメロディーの現出ということになるだろう。したがってこれも〈非現出側面〉であると解釈でき、ここにおける予持も「非本来的現出」と解釈できる。

Nr. 12 では「周知のメロディー」や「繰り返されるメロディー」の知覚においては「直観的予期」が生じるとされている。この「直観的予期」は「前方に [=未来に] vorwärts 方向づけられた志向」と言い換えられ、「各々の新たな音が前方に方向づけられた志向を充実していく。」(X, 167) と記述される。「前方に方向づけられた志向」は「各々の新たな音」によって充実されるとあるが、ここでは「メロディー」の話をしているから、この「各々の新たな音」というのは当然、当該のメロディーの今新たに現れた音であり、これが件の志向を充実しているのである。上でも述べたように、充実とは空虚に志向されていたものが与えられることなので、ここでの「前方に方向付けられた志向」は、当該のメロディーの未来に現れるであろう音を志向していると

6. この「擬似的に」という言葉は、ここでは想起された知覚体験が記述されていることに由来していると考えられる。

7. ただし節の最後に至って、そのような知覚が与える瞬間的な現在が「理想的限界 ideale Grenze」(X, 40) に過ぎないということが述べられる。

考えられる。したがって、「前方に方向付けられた志向」、つまり予持は〈非現出側面〉をもたらず「非本来的現出」と類似的であると解釈できる。

以上の考察から、初期時間論の予持は、概して時間客観の知覚において考えられ、かつ、「非本来的現出」として考えられていたと解釈できることが示された。ところで、「非本来的現出」によってもたらされる〈非現出側面〉、すなわち〈ある対象の未来の時点における現出〉とは、当然〈知覚対象となっているものこれから顕在的になる・まだ非顕在的な側面〉のことであるが、これは、〈知覚対象となっているもの〉によって多かれ少なかれ規定されていると考えられる。たとえば、演奏会で曲を聴いている場面を想定しよう。このとき〈曲〉が知覚対象で、〈曲のまだ演奏されていない小節〉が対象の未来の時点における現出ということになる。このとき、確かに未来の現出に何らかの不確定性が含まれる場合（アレンジ、演奏のミス、曲の記憶が曖昧な場合など）が考えられるが、しかしそうは言っても、〈曲〉が知覚対象となっているということから未来の現出が〈小節〉であることは決まるし、また〈曲〉が対象となっていることから、件の〈小節〉を、その曲のそれまでの部分、舞台上の楽器、楽団の性格などから予想することも可能になる。このように、〈ある対象の未来の時点における現出〉というのは、何らかの〈対象〉の現出であるということから既に何らかの形で規定されているのであって、決して〈漠然とした何らかの現われ〉などではないのである。より積極的に言えば、〈ある対象の未来の時点における現出〉についての予持とは、畢竟、〈何であるか〉が既に決定している現出の内容〉についての予持であると言えらる②。

ところで、フッサールとしては時間客観の知覚だけを考えたわけではなく、時間を可能にする意識、時間意識自体についても考えていこうとしていたようである。たとえば『時間講義』の冒頭でフッサールは「われわれの意図は時間意識の現象学的分析にある」(X, 4) と述べている。つまりこの宣言によれば、フッサールは時間客観の知覚を可能にする時間意識がいかにして可能になるかという問題を考えようとしていたということになる⁸。さて、上で見てきた初期時間論における予持記述の数々は、時間客観の知覚という場面における予持としては問題がなかったように思われるが、では、その時間客観の知覚を時間意識が可能にしているような場面、時間意識が時間を構成するような場面における予持としてはどうだろうか。これについては大いに疑問である。時間意識というものは「絶対的な *absolut*」ものであり⁹、

8. 後で述べることになるが、これは無限遡行の問題につながっていく。

9. 時間意識、あるいはその言い換えである意識流が「絶対的」と表現される箇所は多々ある。たとえば、『時間意識』§34「時間を構成する絶対的意識流 *absolutes zeitkonstituierendes Bewußtseinsfluß*」(X, 73) など。

したがっていかなる場合にも、言い換えればどんなに予想外のことが起きても、恒常不断に成り立っていなければならないはずである。しかし、初期における予持は「非本来的現出」としての予持であったから、知覚対象の不確定要素（たとえばアレンジ、演奏のミス、曲の記憶が曖昧な場合）や知覚対象という枠組みを超えてしまう出来事（たとえば、そもそも曲を知らない場合、次の小節が来るはずの時点で曲とは無関係の騒音が鳴り、曲が掻き消される場合）などによって幻滅することが考えられる。また（①より）予持は個別的な知覚対象の範囲内でしか働かず、そのつど消滅し、また発動する。つまり初期における予持は、個別的時間客観の知覚という枠組みの中のものであるがゆえに、恒常不断に働くことのできない脆弱なものとなっている。したがって初期時間論における予持は、あくまで時間客観の知覚という枠内で働いているものであって、時間意識による時間構成の場面にも関与しているものだとは考えにくいと言える。

では、中期時間論における予持はどのようなものなのだろうか。以下では『ベルナウ』において、いかにしてフッサルが時間意識における予持に迫っていったかを考察する。

第二節 『ベルナウ』における予持

『ベルナウ』において予持はどのように記述されているのか。予め結論を示しておけば、『ベルナウ』の予持は①時間客観の個別性から解放されている、全ての位相を貫く「一つの同じ」（したがって非個別的）予持であり、これを成り立たせるものとして②予持自身を予持する働き（本稿ではこれを P 予持と呼ぶ）が考えられ、「非本来的現出」としての性格は見えなくなっているのである。以下で詳しく見ていこう。

まず①から確認していこう。Nr. 1 の §3 の冒頭においてフッサルは「出来事が $E_0...E_p...E_n$ となっているとき、それぞれの新たな原現前的な与件が〔次々と〕、間断なき期待¹⁰ *stetige Erwartung* に出くわしてくるという意味において、予持 *Protention* が絶えずこの系列を貫いていく。」(XXXIII, 8) と述べている。この箇所では、出来事が

10. 『ベルナウ』の Nr. 1 においては予持 *Protention* のことを *Erwartung* と言い換えている箇所が多々ある。準現在化の予期も *Erwartung* という言葉で言い表されていることを踏まえると、これは非常に紛らわしい。したがって本稿では、予持の言い換えとしての *Erwartung* は期待と訳す。あくまで私見であるが、『ベルナウ』の予持が *Erwartung* と言われるときには、原現前呈示を「待ち受ける」という側面が強く押し出されているように感じられたため、*Protention* の言い換えとしての *Erwartung* には「待」という字が入った期待という言葉が当てた。

連続して生じるときには予持が絶えず全ての出来事の全ての位相を貫いていき、「原現前的な与件」を待ち受けるのだということが確認され、そこから予持が「鎖状に - 絶えず *kettenweise-stetig*」(Ebd.) 進んでいくと記述されている。ただしこれは、単にすぐ隣の位相しか志向しないような諸々の予持が数珠繋ぎになっているということではなく¹¹、「一つの同じ *ein und selb*」(XXXIII, 9) 予持が全ての位相を貫いている¹²ということである。このように「一つの同じ」予持が全ての位相を貫くとき、この予持は「全ての、到来してくるもののうちで観念的に *ideel* 区別されうるもの」(XXXIII, 8) に向けられていると述べられる。あるいは、この予持は「たとえわれわれが区間分割 *Streckenteilung* を観念的に *ideell* 遂行しつつ考えたとしても」(XXXIII, 9) すべての位相を貫くとされている。ここで言われている「区間分割」とは出来事のまとまりをつけることであり、それによって見出される出来事が「全ての、観念的に区別されうるもの」である。たとえば、演奏会を一つの出来事として見るか、あるいはその演奏会の中での一曲を一つの出来事として見るかを決定することが前者であり、この時出来事として取り出される演奏会や一曲が後者であろうと考えられる。つまり、予持が貫いている位相の中においてあらゆる「区別されうるもの」が見出されるし、またどのような「区間分割」を遂行しようと予持は全ての位相に向かうのである。このことから、「一つの同じ」予持は、出来事が如何に区分されるかということ、あるいはどのような出来事が予持されているかには関わりなく全ての位相を貫いているのだと理解できる。また、この「一つの同じ」予持は「まだ流れのうちにある出来事が生じてくるということに向かう志向 *Intention auf Eintreten des noch im Fluss befindlichen Ereignisses*」とも表現されている。この表現からも分かるように、予持は出来事の内容というよりは〈出来事が生じてくるということ〉自体に向けられており、したがって何らかの出来事が生じさえすればそれによって充実されるのである。内容に関わりなく、〈何らかの出来事が生じてくること〉、言いかえれば原現前呈示してくること自体によって、充実されるのであれば、この予持は決して幻滅することはなく、絶対に充実するということになるだろう。この充実については後でまた触れる

11. 詳しくは以下のように述べられている。「上述のこと [未来へ向けられた期待 [=予持] がやって来ている出来事、あるいは流れている出来事区間に対して向けられているということ] は、ある点において生き生きとしている期待 [=予持] が、ただ次の点、単なる境界にのみ向けられているということや、[予持の] 充実とともに、また『すぐ隣の点』にのみ向かう新たな予持が閃き出てくる、などということなのではない。」(XXXIII, 8)

12. より詳細には、次のように述べられている。「われわれが諸位相において連続体というもの考えるとき、それ [=志向性、予持] は位相からすぐ次の位相にいくが、しかしその位相を通り抜けていき、それに続く位相にいく、しかしその位相を通り抜けていき、そのまた次の位相にむかい、そうして全ての位相に向かうのである。」(XXXIII, 8)

ことになるが、いずれにせよ以上から、まず個別的な時間客観を超えた「一つの同じ」予持であるという点において、『ベルナウ』の予持は初期の予持とは既に大きく異なっている①。

さて、この「一つの同じ」予持について、フッサールは「予持的諸作用の連続体は、すべての位相それ自身において一つの連続体なのであり、しかもその連続体における一つの点は充実された予持であり、残りについては空虚な予持である」(XXXIII, 9)と述べている。つまり、「一つの同じ」予持は一つの点(=今点)においてのみ充実されそれ以外の残りの部分は空虚に留まっており、そしてそのような構造を持った「一つの同じ」予持がそれぞれの位相において成り立っているとされているのである¹³。以上のことが確認されたのち、フッサールは以下のように述べる。

進行においては絶えざる継起的な合致 *Deckung* が存続する。まったきもの *das Volle* が空虚の中へ入りつつ、ある変様された作用を作り出す。その作用はしかし、残りの空虚[充実化されていない予持]が先行していた空虚と合致する一方で、原現前呈示する位相についての充実化(そしてそれを通じて作用は原現前呈示するようになる)として、空虚のある一つの構成要素に関して、以前の作用と合致する。(Ebd.)

ここでは、予持されたものが充実される様子が描かれるとともに、前後する位相における予持同士の関係が述べられている。まず予め確認しておく、ここで言われている「作用」とは予持のことであり、「空虚」とは予持の空虚な部分であり、そして、「まったきもの *das Volle*」とは「原現前的与件」のことであろうと考えられる。以上を確認したうえで、この箇所解釈に移ろう。引用冒頭の「進行 *Fortgang*」(Ebd.)は(そして同じ段落の「過程 *Prozess*」(Ebd.)も)、原現前的与件が与えられていく(つまり予持が充実していく)経過のことだと解釈できる。さて例えば、ある時点 A において予持されていた x が、その後の時点 B において原現前呈示してきたとする。そのときのことを、ここでは「充実的なものが空虚の中へ入りつつ、ある変様された作用を作り出す。」と表現していると考えられるが、これは、x が原現前呈示することによって予持(=「作用」)が充実された予持(=「変様された作用」)になるということであろう¹⁴。さて、このようなことが起こるとき、一方では、変様された作用

13. このことは再三にわたって述べられており、例えば Nr. 1 の§4 においても同様の記述がみられる。(Vgl. XXXIII, 12)

14. §3 では「したがって原現前呈示は充実された予持である。」(XXXIII, 9)とされている。

が「原現前呈示する位相についての充実化（そしてそれを通じて作用は原現前呈示するようになる）として、空虚のある一つの構成要素に関して、以前の作用と合致する」ということが起こると述べられている。ここで「空虚のある一つの構成要素」ないしは「以前の作用」と表現されているのは、A においてはまだ充実されていなかった x を予持する働きであると考えられる。したがってここでは、A と B の両方の位相における x への予持が「合致」するということが述べられているのである。また、もう一方では「残りの空虚が先行していた空虚と合致する」ということが起こるとされている。先の例に則すと、A において y が予持され、かつ B においてもこれがまだ原現前呈示にもたらされないとき、B における y への空虚な予持と A における y への空虚な予持も「合致」するのである。

以上のように異なる位相における予持同士が「合致」し合うことが確認されたのち、フッサールはその予持同士の関係についてさらに以下のように述べる。

各々の先行する予持は、後続する把持が同じ把持の系列の先行する把持に対して関係するのと同じように、後続する予持に対して予持的な連続体において関係する。先行する予持は、全てのより後の予持を志向的に含んでおり（それらを含意しており）、後続する把持は全てのより早い把持を志向的に含んでいる。

(XXXIII, 10)

ここで登場する「先行する」「より早い」「後続する」「より後の」という表現も、「進行」や「過程」に則っている。先ほどの AB を基にして言えば、A において発動している予持ないし把持が「先行する」「より早い」と形容され、B において発動している予持ないし把持が「後続する」「より後の」と形容されていると考えられる。さて、それを踏まえてこの記述を振り返ってみよう。すると、これよりも前の部分では「合致」と言い表されていた予持同士の関係が、ここではさらに詳しく表現されていることがわかる。記述によれば、「先行する予持」、つまり A における予持は、「より後の予持」すなわち B における予持、さらにはその後のすべての時点における予持を志向的に含んでいるという。つまり A における予持は、B において予持が発動していること、を予持しているのであり、こう言ってよければ A においては予持の志向的な入れ子構造が見られ、A における予持は B における予持よりも志向的に重層化しているのである。把持についても同様の入れ子構造が見られる¹⁵が、ただし把持については重層化の方向が反対になっており、B における把持の方が A における把持よ

15. 把持の入れ子構造については、たとえば『時間講義』§38 においても触れられている。

りも重層化している。すなわち、把持されたものが沈降していくほどそれを把持していく働きは志向的に重層化していくのである。そしてその方向と反対ということを考慮すると、予持されているものが今点に近づくにつれて、それを予持している働きは重層的な状態から単純な状態へと移行していくのである。このことをフッサールは、「より後の予持はより早い予持の充実であり、より早い予持は進行において充実化される。」(Ebd.)「各々のより後の把持は進行において『脱充実化される』」(Ebd.)と表現しているようである。つまり、予持された与件が今点に近づいてくると、予持が志向的に単純になっていくことが「充実化される *sich erfüllen*」と表現され、把持された与件が沈降していくこと、把持が重層化していくことが「脱充実化される *sich entfüllen*」と表現されている。この「充実化される」という言葉を理解する際には、『ベルナウ』における予持は時間客観の具体性に関わりを持たず、ただ原現前呈示自体によって充実される、ということを経験しなければならぬ。このことを考慮すると、ここで言う充実化とは具体的に予想されていたものにはっきりした内容が与えられることとしての充実化、したがって幻滅もありうるような充実化、なのではなく、重層的だった予持志向が少しずつ単純になり今点に近づいてくるとしての充実化、予持志向が単純化しさえすればよい充実化、したがって幻滅が考えられない充実化、なのだと理解されるべきであろう。

予持にも把持にも、重層化していく方向は反対であるが、上述のような志向の入れ子構造が見られることが分かったところで、フッサールは以下のように述べる。

我々は双方 [=予持と把持] に間接的志向性を持ち、それぞれの間接的志向性には志向性の二重の「方向」が属している。すなわち、一次客観 *primäres Objekt* への方向と二次客観 *sekundäres Objekt* への方向、つまり「作用 *Akte*」 [=予持や把持] と与えられる仕方のいかに [=時間様態] における一次客観 *primäres Objekt im Wie ihrer Gegebenheitsweise* に向かう方向である。(Ebd.)

ここで言われている間接的志向性とは、上で確認した入れ子状になっている志向性のことだと考えられる。そしてこの志向性には「一次客観」と「二次客観」に向かう二重の方向があると述べられる。この「一次客観」「二次客観」という語は、フッサールがブレンターノから受け継いだものである¹⁶。「一次客観」とは意識が向かうと

16. ブレンターノはこれについて、「われわれは音を一次客観、聞くこと *Hören* を二次客観と呼ぶことができる。」(Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt* (erster Band), S. 180.)と述べている。

ころの対象であり、これに対して「二次客観」とはその対象を捉えようとする意識作用そのもののことであると理解できる。『ベルナウ』に話を戻すと、ここで言われている「二次客観」とは、文脈からして予持する働きや把持する働きのことであろうと考えられる。つまりここで述べられていることを、便宜的に予持の側についてのみ再構成すると以下ようになる。予持同士の「合致」が生じているとき、「先行する予持」が「後続する予持」を志向的に含んでいるとき、あるいは予持の入れ子構造が成り立っているとき、予持は予持されている与件（＝一次客観）に向かうと同時に、その与件を捉えている作用自体（＝予持）とその対象がどのような時間様態において与えられているかということにも向かっているのである。そしてこの予持そのものを予持している働きこそは、ローマーの語法にならって新たに名付けるとすれば、P 予持と呼ばれるべきものであろう。ここにおいて示されたように『ベルナウ』においては、予持そのものに向かう予持、P 予持が見出されるのである②。

第三節 P 予持の意義

最後にこの P 予持が『ベルナウ』においてどのような役割を果たしているのかを考えてみたい。結論から言えば、P 予持によって『ベルナウ』の予持は時間客観の知覚と時間意識の自己構成にまたがるものになった、ということが考えられる。

まず明らかなこととしては、上でも確認したように、予持は原現前呈示を捉えるものとして考えられており、その考察の過程において P 予持あるいは P 予持が可能にする「一つの同じ」予持が見出されているということを指摘しておくべきであろう。例えば §3 においては「新しい原現前呈示与件（ヒュレー的 *hyletisches* [原現前呈示与件]) を受け取って持っている意識においては、ある新しい期待 [=予持] が生じるのではなく、一つの同じ期待 [=予持] がその志向的連続性を伴って続いていくのであり、ただその期待が、その系列 [の順序] に従ってある一つの空虚点を充実して持っているのである。」(XXXIII, 9) と述べられている。ここでは原現前呈示を捉える意識は「一つの同じ」予持を持つとされている。また、§2 においても、以下のよう

常に新しい原現前的なものが登場してくるということは、この与件が単に登場してくるということの意味しているのではない。そうではなくて、必然的に時間構成するような過程 *Prozess* の本質には以下のことが属している。すなわち、音

が聞こえてきて、その際あらゆる動揺にも関わらずそれでも一つの音が構成される限り、したがって同じ種類の、そして内容（本質）の絶えざる段階化の常に新しい原現前的諸与件が生じ、絶えざる『期待』（ただし注意的な自我の関与なしの[期待]）、予持がやって来ているものに向けられ、それを充実化の仕方を取り上げ、したがって志向的に形成する限り、前に向けられた志向性は必要不可欠である、ということである。（XXXIII, 7）

ここでは、音などの対象が構成される時には、あるいはそもそも原現前的な与件が与えられる時には、前に向けられた志向性すなわち予持が「必要不可欠である」、と述べられ、さらにそれらのことが「必然的に時間を構成する過程の本質」に属するとまで述べられている。したがって、「常に新しい原現前的なものが登場してくるということは、この与件が単に登場してくるということの意味しているのではない」のであり、原現前呈示とは予め予持されたものが登場してくることなのである。ここでも原現前呈示にとって予持が必要であるということが述べられている。以上の引用からも分かるように、『ベルナウ』における予持は原現前呈示を捉えるもの、つまり何かしらの与件を捉えるものとして考えられている。これは時間客観の知覚にも通じるものであると言えよう。以上より、『ベルナウ』においてはまず一つの側面として、与件が与えられてくること（＝原現前呈示）についての予持という、時間客観の知覚にも通じる予持が述べられている。

他方、『ベルナウ』における予持は時間意識の自己構成にもまたがるものである。P 予持が見出された Nr. 1 の§3 の終盤で、フッサールは「いかにして把持と予持は絡み合うのか。この絡み合いにおいて、それらはいかにして根源的時間意識の統一を持つのか。」（XXXIII, 10）という問いを提起し、その問いを受けて§4¹⁷において展開された記述の中で、ローマーの言う R 予持が見出されることになる。そこでは「必然的発生の法則として」いくつかのことが述べられるのだが、そのうちの一つは以下のような内容である。

つまり、予持は同じ仕方での系列 [= 把持系列] の継続に向けられており、そしてその意識は、核的与件 *Kerndaten* として働く原与件の経過に関する予持であり、また同様に、把持において働いている諸射映 *Abschattungen* を伴うような把持に関する予持なのである。（XXXIII, 13）

17. この§4には、フッサール自身によって「現象学的時間客観性の構成における把持と予持の相互内属 *Ineinander*」という表題が付けられている。

引用においてはまず、「原与件の経過」に対して予持が働くとされている。これは今の時点における原与件の「経過」について、つまり原与件（＝原現前的与件）が把持的に沈降していくことを予持しているということであろう。また、把持に対しても予持は働くとされている。「同様に」という表現から、これは原与件の場合と「同様に」、把持されているものがさらに把持的に沈降することを予持している、ということなのだろう。この「把持に関する予持」が R 予持である¹⁸。他にも Nr. 2 の §1¹⁹、Nr. 2 の §2²⁰において R 予持に関する記述が見られる。

ところで原現前呈示に対する予持は、原現前呈示ということが起こるだけで、その内容にかかわりなく、充実化されるものであった。R 予持についてもこれと類似したことが成り立つと考えられる。すなわち、R 予持は、把持が沈み込んでいくということに向けられた予持であって、どのような内容が沈んでいくかということに向かうようには記述されていない。このことから R 予持は、把持されたものがさらに沈み込んでいくということが起こりさえすれば充実されると考えられる。したがって R 予持もまた幻滅のありえない予持であると言えるだろう。

ただし、本稿においては『ベルナウ』で R 予持が見られること自体を主張したいのではない。R 予持に関して本稿で重視したいのは、これが把持という意識の働きに対する予持であるという点、これが意識のこれからの働き・運動性についての自己意識であるという点である。初期における予持は、時間客観の知覚を前提とした「非本来的現出」としての予持であり、これは意識の働きによって捉えられはするが、しかし意識の働きに向かうようなものではなかったと考えられる。現に第一節で検討した Nr. 45 全体においては、準現在化の働きがその原本であるところの知覚の働きをも捉えている、つまり意識の自己意識がある、という趣旨のことが述べられていたのだが、しかしこのような内容の Nr. 45 においてさえ、予持は「この音に向かう予持」とは記述されても、意識の働き自体に向かう予持として描かれることはなかったのである。一方『ベルナウ』においては P 予持（そして R 予持）が描かれているが、まさにこれら P 予持・R 予持は時間構成する意識の自己意識に他ならないと解釈できる。紙幅の関係上、機会を改めて論じなければならないが、上記のように考えられるのなら、『ベルナウ』における予持は時間意識の自己意識・自己構成に深く関与し

18. ローマーは R 予持を「把持の内実がさらに沈み込んでいくだろうという期待」としてしている。

19. Nr. 2 の §1 では時間図表を記述する際に R 予持に触れている。

20. たとえば、「予持は既に与えられた把持的区間をもつかむ ergreifen」(XXXIII, 24) という記述が見られ、これが R 予持に関する記述であると考えられる。

ていると考えられる。

以上をまとめると、『ベルナウ』の予持は一方では時間客観の知覚の場面に通じ、他方では時間構成に通じている。そしてこれは、P 予持、すなわち予持が自らを予持するという働きが見出されたことによって可能になっていると考えられる。

課題

最後に、本稿の成果から導き出される幾つかの課題の内の主要な二種類を示しておきたい。

一つ目の課題は、上でも少し触れたが、時間意識の自己構成に関わる。改めて確認しておこう。フッサールの時間論においては「無限遡行」の問題²¹が常に付きまわっており、フッサールは時間意識の自己構成こそがこの問題の解決のカギを握ると考えていた。すなわち、時間客観を構成する時間意識が自らをも時間的に構成してくる²²ことによって、〈構成するもの〉と〈構成されるもの〉の関係が時間意識の問題から締め出されると、考えていたようである。このことは、フッサールが後期において思索した「己れ自身のうちで己れを時間化する絶対者」にも関わっていくであろうと考えられる。本稿で明らかにした P 予持は予持に対して働く予持であり再帰的な構造を有している²³が、この絶対者の問題のうちにも自己構成・再帰性の問題が絡んでいると考えられる。では、P 予持が持つこの再帰的構造は「己れ自身のうちで己れを時間化する絶対者」という問題とどのような関連を持っているのだろうか。より踏み込んで問うならば、未来を志向する予持が、「己れ自身のうちで己れを時間化する」という働きに関与するとき、予持が関与することで「絶対者」はどのように「己れを時

21. 時間客観の知覚を可能にしているのは、つまり時間を構成しているのは時間意識であるが、この時間意識自体も、客観的対象の持つ時間とは異なるいわば先現象的な時間という意味での時間的構造を持っているのである。しかし時間意識が時間構造を持つとされているとき、今度はこの時間意識の時間的構造を可能にするような意識を考えなければならなくなる。しかしそうすると、今度はさらにその意識を可能にする意識が必要になり、これは無限に繰り返される。つまり無限遡行の問題とは、大雑把に要約すると、〈構成するもの〉と〈構成されるもの〉を想定した場合に、構成されることなく構成する究極的な〈構成するもの〉が思考から無限に逃れ去っていく、という問題であると言えるだろう。

22. 『時間講義』においては以下のように述べられている。「音の内在的な時間的統一を構成し、しかもそれと同時に意識流それ自身の統一をも構成するのは唯一の同じ意識流である。」(X, 80)

23. 実際フッサールは、Nr. 1 の§3 において、予持と把持の両方において二重の志向性が見られることを指摘した後、「両方 [予持と把持] においてこのこと [=二重の志向性があること] は志向性の無限遡行につながっていかない。」(XXXIII, 10) と述べている。

間化」し、またそれによってどのような性格を得ようになるのだろうか。以上の、〈自己構成する時間意識〉ひいては「己れ自身のうちで己れを時間化する絶対者」と P 予持との関係にまつわる課題群が、一つ目の課題群である。

二つ目の課題は、精神疾患などに対する予持を用いた説明の可能性の課題だと言える。まず、本論でも再三述べたように、P 予持が可能にする「一つの同じ」予持はすべての位相を貫き、幻滅することなく充実する²⁴。これは極めて漠然とした予持であるが、しかし内容を規定しないからこそ、〈何らかの出来事が生じた〉という水準における「充実化」として、いかなる出来事をも受け止めることができる、あるいは、とりあえずは体験として受け入れることができる。このように解釈すると、P 予持とそれによって可能になる「一つの同じ」予持を、体験を成り立たせる普遍的な構造の一つとして見ることができるだろう。つまり裏を返せば、このような構造が不全に陥った場合、そのときわれわれの体験は、少なくとも、馴染みのものとは異なるものになるのではないだろうか。たとえば、統合失調症や自閉症などにおいては、新しいもの（仕事や道具の使い方や対人関係など）に対する対応力が弱る、あるいは漠然としたものを捉える力が弱る、などの症状が見られるという。これらの症状について、出来事を漠然と予持し、どんなに新しいものが来てもそれを受け入れるという「一つの同じ」予持やそれを可能にする P 予持が正常に働いていない、という解釈を与えることはできないだろうか。さらに、統合失調症患者にはしばしば常同症という、単純な内容の行動や言動を繰り返す様子が確認されるのだという。これについて、P 予持が異常をきたしているがゆえに支えを失った体験を、内容的に単純であるがゆえに幻滅のない行為を繰り返すことによってなんとか支えなおそうとしている、と解釈できないだろうか。もし今挙げた一連の説明が妥当である場合、統合失調症と P 予持、つまり再帰的な意識の働き（それも未来的な性格をもった働き）との関係が指摘できるのかもしれない。また、以上の説明が誤っている場合でも、P 予持を用いた別様な説明の仕方があるのかもしれないし、ほかの疾患に対してなら有効な説明をすることができるかもしれない。いずれにせよ、精神疾患に対して現象学からのアプローチを行っている先行研究²⁵に対して、本稿あるいはその延長線上にある研究から提供できるものがあるかもしれない。以上で述べた、予持についての成果を用いた精神疾患へのアプローチにまつわるものが、二つ目の課題群である。

24. 意識が死んでしまい、意識にとって出来事が起きない場合においてさえも、予持が幻滅したということを意識は知ることができないから、この場合も予持は幻滅しない。ただし死の問題は、本稿の文脈とはずれるが、現象学にとって重要な問題である（例えば、フッサール全集 42 巻など）。

25. たとえば木村（2006 年）、村上（2008 年）など。

しかしいずれにせよ、『ベルナウ』においてはP予持およびそれによって可能になる恒常不断の予持が記述されている。これによって、初期においては個別的な時間客観の知覚に関与するに過ぎなかった予持が、『ベルナウ』以降は時間構成の場面にも関与しうるものとなっていると考えられる。したがって以上から、『ベルナウ』における予持は初期時間論における予持から大きく変化したものになっていると言えるだろう。

凡例

- ・フッサール全集からの引用は巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で表記した。
- ・引用文中における稿者の補いについては [] を用いた。原文斜体は傍点で表現した。
- ・引用は拙訳であるが、邦訳があるものについては適宜参照させていただいた。

参考文献

- ・ Franz Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt* (erster Band), Hamburg : F. Meiner, 1973.
- ・ E. フッサール、『内的時間意識の現象学』、立松弘孝訳、みすず書房、1967年。
- ・ E. フッサール、『イデーニ I - II』、渡辺二郎訳、みすず書房、1984年。
- ・ E. レヴィナス、『時間と他者』、原田佳彦訳、法政大学出版局、2012年。
- ・ クラウス・ヘルト、『生き生きした現在』、新田義弘 小川侃 谷徹 斎藤慶典 訳、北斗出版、1997年。
- ・ 谷徹、『意識の自然』、勁草書房、1998年。
- ・ 遠山照彦、『統合失調症はどんな病気かどう治すか: わかりやすい統合失調症の話』、萌文社、2005年。
- ・ 木村敏、『自己・あいだ・時間』、筑摩書房、2006年。
- ・ 村上靖彦『自閉症の現象学』、勁草書房、2008年。
- ・ D. ローマー、「フッサールのベルナウ草稿につながる予持の分析——予持は何を“予持”するのか?」、『フッサール研究』所収、第二号、浜渦辰二訳、2004年、191 - 206頁。
- ・ 真達大輔、「ベルナウ草稿における未来予持と時間の始まり」、『現象学年報』所収、第二十二号、173 - 176頁、2006年。